

て ま り

——ひたすらに「くり返す」ことの意味——

本 田 和 子

まりをつく。それは、何と単純な行為のくり返しであることか。

まりを、地面に向けて打つ。はね返ってくるのを、同じ掌でとらえてまた打ち返す。適度な力を加えられたまりは、その完全な球体と弾性のゆえに、必ず、はね返ってくるだろう。それをまた、打ち返す。再び同じように、はね返ってくることを期待しながら。まりのつき手は、こうして、ただひたすら、同じ行為をくり返すのである。

「一つ、二つ」と数を唱えながら、真剣につき続けるつき手の関心は、そのまりを幾つまで続けてつけるかに集中しているように見える。それはまた、ひたすらにつき続けるという己れの行為を、何回くり返すことが出来るかという関心でもある。

まりつき、このひたすらなる「くり返し」のどこに、それほど魅力が潜んでいるのだろうか。

* * *

出来るだけ、たくさん、ついでみようとするのは、その数を誇るためなのだろうか。他人と数を競い合うために？ 或いは、自身の記録を伸ばそうがために？

然し、まりつきは、必ずしも対抗者を必要とする遊びでもないし、幾つつけたかはその都度記録していくわけでもない。まりを幾つつけるかということは、二十とか三十とかいう達成し得た結果にもまして、その「つき続ける」行為が、人を魅すのだと言えないだろうか。

試みに、私どもも、ゴムまりを一つ手にとってみよう。まりは、その完全なまるやかさのゆえに両掌の中にすっぽり包みこまれるが、はずむ感触は、いつまでも私の世界に一体化してとどまることを肯じないそのありようを暗示している。その弾力に満ちた球体は、つくなり投げるなり、何らかの動きを誘い出さずにはおかない。そしてそれは、私の掌の中からとび出して、彼自身の運動を始めるためのきっかけなのである。

一つ、まりをつく。適当な力で、ほどよい角度で地表に落とされたまりは、素直にはね返ってくる。私と袂を分かっているとび出していった小さな物体は、再び結合を求めるかのように戻ってくる。然し、掌にぶつかってくるのは弾力に満ちた動きの感触である。それはその物体が、ほんの一瞬しか私の中にとどまっていなことを告げる。私の掌は、その物体の求めに応じて、瞬間に、それを地表へと打ち返すだろう。考えることも、判断することも必要としないほどの、瞬時の応答である。

このとき、まりは、私の掌にとつて、旅立つためにのみ帰ってくる不思議な物体である。掌は、挫折を知らないくり返し、永遠の連続を夢みて、注意深くまりをはずませ続けるのだ。巧みなつき手に扱われるとき、まりはさながら、見えない糸で操られているように、つき手と地表を往復するだろう。

然し、まりの往復運動は振り子のそれとは異なる。掌にこめられる微妙な力と、掌の作り出す極く僅かな角度によって、それは保たれている。そのバランスがくずれるとき、運動は直ちに終る。まりと人を結ぶ見えない糸は、周到な注意と、不断の集中の所産である。くり返すためには、瞬間々に精魂をこめねばならない。

* * *

良寛和尚は、周知のとおり、まりをつくことをこよなく愛した

人であった。托鉢に出かける彼の袂には、常に三個の糸まりがしのばせてあったと言う。村里で出会った子どもらと、日が暮れるまでまりつきに興じて、托鉢を忘れてしまったとは、余りにもよく知られた話である。

没入しきつて、さながら一種の「行^{まよ}」でもあるかのように、まりつきに熱中する彼に向かって、その真意をいぶかしんだ人も少なくなかった。然し、良寛は、「何のために」という弟子たちの問いに対して、「ただつくのみ」と答えている。

「何のために」「何をねらつて」という前に、掌にはね返ってくるまりはつき返さねばならない。それをためらった瞬間に、まりと人の結びつきは絶たれてしまう。然し、一瞬々に精魂をこめ、その行為をひたすらにくり返し続けると、まりと人の間には、内密の、そして永遠の対話が続くのである。

フレールは、恩物の第一として「まり」を位置づけた。まりの遊びを、幼児の諸活動の中の最も根源的なものと、みなしたのである。

ところで、それは、幼児にとつてだけだろうか。まりをつくという行為の中には、私どもにとつても、とりわけ、保育という営なみに関して、最も根源的なありようを暗示するものが、秘められていると言えないであらうか。

(お茶の水女子大学)